

## 「カナの婚礼」

ヨハネの福音書 2:1~11



### 1. カナ



2:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。

2:2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。

「カナの婚礼」と呼ばれる有名な出来事について学んでみたいと思います。場所はガリラヤのカナという町です。カナという名前は、カーナー(קָנָה)、ヘブル語で「得る、買い取る、買う」という意味と、「創造する、形造る」という二つの意味を持つ言葉

に由来すると考えられます。

このカーナーで「婚礼」があり、そこにイエシュアと弟子たち、そしてイエシュアの母が招かれたことが記されています。「婚礼」と訳されていますが、一般に言う結婚式のことはありません。ここで使われている「婚礼」ハトゥツナー(הַתּוֹקֵן)は、「縁を結ぶ」、結婚をする約束を交わすこと、つまり婚約を意味するハータン(הָתֵן)の派生語です。このハータンが聖書で初めて使われている箇所が創世記 34:9 にあります。

私たちは互いに縁を結びましょう。あなたがたの娘を私たちのところにとつがせ、私たちの娘をあなたがたがめとってください。(創世記 34:9)

ここで「縁を結び」と訳されているのがハータンです。このように、ハータンが意味するのは結婚式の一歩前の段階で、結婚の約束を交わすいわば「婚約式」です。しかしユダヤではこの婚約式も、結婚式に負けにくいくらい盛大に祝われます。ユダヤ人は本来、花嫁となる女性は花婿の父親が探し、選びます。そして女性の側の家の合意が得られれば、まず契約金を払います。それから婚約式としての宴を、親族や友人を招いて、盛大に執り行います。契約金及びこの婚約の宴にかかる費用、更に結婚式の費用もすべて花婿の父親が負担します。このようにユダヤ人にとって結婚とは、まさにカーナーが意味するように代価を払って「買い取る、買う」行為なのです。

結婚した夫婦が共に住むように、神様は私たち人間と共に住むための家として、この天地宇宙を創造されました。

「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。(創世記 14:19)

この「造られた」という言葉が同じくカーナーです。このように、カーナーという名前が、結婚と天地創造を密接に結び付ける意味を持っていることが解ります。しかし悪魔の策略により、最初の結婚、最初の家であるエデンにおける神様と人間との関係は破壊されてしまいました。これを回復させること、完成させることが聖

書全体に貫かれる神様の VISION、ご計画、マスタープランである「御国の福音」です。この視点をもって「カナの婚礼」のその内容に入っていきたいと思います。

## 2. なくなったぶどう酒

2:3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。

ユダヤの婚約式は、宴の最後に花嫁となる女性が花婿となる男性から杯を受け取り、そのぶどう酒を飲みほして完了、つまり婚約成立となります。ですから宴の最中にぶどう酒がなくなるというのは、婚約が成立しない、大変な事態だということになります。ここに一つの型が表されていると考えられます。



まずこの「なくなったぶどう酒」とは、どんなぶどう酒であったかということです。後でイエシュアが奇蹟を起こして水をぶどう酒に変えて出すことがこの「カナの婚礼」の奇蹟の最も重要な出来事ですが、イエシュアが出したぶどう酒は「良いぶどう酒」と呼ばれています。それに対してこの「なくなったぶどう酒」は「良いぶどう酒」とは別物です。ユダヤ人の物事の考え方は、私たち日本人と大きく違い、非常にはっきりしています。私たちがよく使う「普通」とか「どちらでもない」という概念がありません。つまり愛するか愛さないかではなく、愛するか憎むかです。善でなければ悪、良いか悪いかです。つまりこの「なくなったぶどう酒」は、良いぶどう酒ではないので「悪いぶどう酒」だということになります。この「悪いぶどう酒」が、すべて飲みほされてしまった時、これは一体何を表しているのでしょうか。すべて飲み込まれ、そして空っぽになった器、慌てふためく人々、これは墮落したイスラエル、なくなったイスラエル、失われたイスラエルを表していると考えられます。

彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。(イザヤ 5:2)

この酸いぶどう、ベウシーム(בְּאוֹשִׁיִּים)は、バーアシュ(בְּאֵשׁ) 訳すと「臭くなる、悪臭を放つ」という意味の言葉から由来しており、酸いぶどうというよりすっぱい臭いのするぶどう、すなわち腐ったぶどうという意味で、この悪いぶどうは、旧約聖書に記されたイスラエル、アブラハムの子孫として選ばれつつも、神様を拒絶し、人間の王を立て、偶像礼拝に走り、分裂し、拳句の果てに滅ぼされてしまったイスラエル王国を指しています。婚礼の真っ最中にぶどう酒がなくなって、慌てふためく主催者側の様子は、アッシリヤやバビロンによって滅ぼされた日のイスラエルの民を表すものだったのではないのでしょうか。そして究極的には、終末の大患難時代と呼ばれる、反キリストによるユダヤ人への大迫害を指すものと考えられます。その時イスラエルは、この3節でイエシュアの母がしたように、「イエシュアに向かって」呼び求めるのです。

## 3. わたしの時

2:4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」

一見ご自分の母親に対して非常に無礼な言い方をしているようなイエシュアの態度に困惑してしまいますが、他の訳を見えますと

「ぶどう酒がありません…女よ、それが私とあなたにとってどうしたというのです。」(岩波訳)

と訳されており、イエシュアが無関係だと言っておられるのは母に対してではなく、ぶどう酒がなくなったという事実に対してであるとも解釈できます。先ほど言いましたように、このなくなったぶどう酒は、良いぶどう酒ではなく悪いぶどう酒で、なくなった、失われたイスラエルを表しています。ではなぜ悪いぶどう酒になってしまったのか。それはまさにここでイエシュアが言われているように「何の関係があるのでしょうか」、つまり関係がない、神様に聞き従わない、イスラエルが神様との関係を拒絶したことにあります。それはまさにここに表されているように、子どもがその生みの母親を拒絶し、断絶するようなものです。そしてこの拒絶が結果的にイエシュアを十字架につけるのです。その受難についてイエシュアはこう言われています。

あなたがたは、わたしが毎日宮でいっしょにいる間は、わたしに手出しもしなかった。しかし、今はあなたがたの時です。暗やみの力です。」(ルカ 22:53)

イエシュアは今は「あなたがたの時」、すなわちイスラエルが神様を拒絶する、神様のご計画を、イエシュアを拒絶する時だから「わたしの時」は来ていない、わたしの時ではないと言われました。ですから「わたしの時」とは逆にイスラエルが神様のご計画を受け入れる時、イエシュアを待ち望み、迎える時、すなわちイエシュアが地上に再臨される時であると言うことができます。

しかし注意していただきたいのは、「わたしの時はまだ来ていません」ということは、「わたしの時は来ません」と言われたわけではなく、逆に言えばその時は「必ず来ます」ということです。ですからその時が来るのを待つ必要があるということです。

2:5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」

この手伝いの人たちは、イエシュアがいつ何を言われても、即座に対応できるように待ち構えている、まさにその時に備える人、つまりイエシュアの再臨を待ち望む人を表していると考えられます。

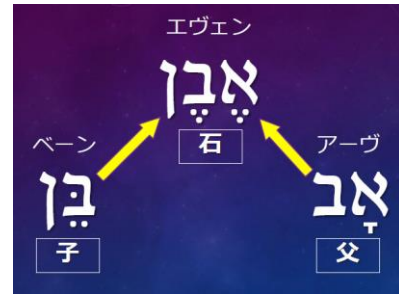


#### 4. 六つの石のみずがめ

2:6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。

2:7 イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。

六つの石のみずがめがありました。石はヘブル語でエヴェン(אֶבֶן)と言います。この言葉はアーヴ(אָב)「父」とベーン(בֶּן)「子」を合わせてできた言葉と見ることができます。父なる神様は、御子であるイエシュアによって「六」日間で天と地とそこに住むすべての生き物、そして人間を創造されました。これら被造物と呼ばれる全てに共通するものが水です。水分を失えば全てのものは塵になってしまいます。六つの石、エヴェンに注がれた水、これは御父と御子による、正確に



は御父の、御子による天地創造の御業を指し示すものであると解釈できます。ですから 7 節の水がめの縁までいっぱい注がれた水とは、神様のその御業が完全であったことを意味していると考えられます。

2:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」  
彼らは持って行った。

この時奇蹟が起こり、六つの水がめの水は全てぶどう酒に変わります。そして花嫁となる女性は、花婿となる男性からぶどう酒の杯を受け取り、めでたく婚約成立となったことでしょう。ユダヤのしきたりでは、婚約が成立した男女は、結婚式が終わるまではまだ同居することはできませんが、社会的には夫婦同然と見なされ、万が一婚約を解消する場合には、離婚と同じ手続きを踏まなければならないほどの関係となります。六つの水がめと注がれた水が御父の御子による天地創造の御業を表していると述べましたが、それを記した創世記 1 章~2 章の最後の言葉がこれです。

#### 創世記

2:24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

2:25 人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

つまり天地創造の御業は、男と女が、花婿と花嫁が結婚し、何の隠し事もない、親密な関係、まさに一心同体の関係になることで完成、完了となるのが解ります。

2:9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったのに、——しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた——彼は、花婿を呼んで、

実際に水がめに注がれた水の量はおよそ 600 ℓ ですから、このぶどう酒に変わった水は花嫁だけでなく、会場にいた全ての人々が飲んだことでしょう。同様に、御父の御子による天地創造の御業、その恩恵にこの世界に生きる全てのものが与っています。しかしこの宴会の世話役のように、それがどこから来たのか「知らない」、つまり神様のご計画を知らない者と、水をくんだ手伝いの者たちのように「知っている」者がこの世界には存在します。

#### 5. 良いぶどう酒

2:10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」

イエシュアのぶどう酒は「良いぶどう酒」でした。この「良い」という言葉はヘブル語でトーヴ(טוב)といい、神様の本質を表す言葉の一つです。このトーヴが聖書で初めて使われているのが、やはり天地創造の場面です。

#### 創世記

1:4 神はその光を見て、**良し**とされた。神はその光とやみとを分けられた。

1:10 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て**良し**とされた。

1:12 地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。神はそれを見て**良し**とされた。

1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て**良し**とされた。

1:21 神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て**良し**とされた。

1:25 神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてののはうものを造られた。神はそれを見て**良し**とされた。

1:31 神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に**良かった**。夕があり、朝があった。第六日。

このトーヴを構成している三つの文字のそれぞれの意味をみます。



テット(ט)…蛇を象った象形文字です。知恵、知識を意味しています。

ヴァーヴ(ו)…釘、爪を象った象形文字です。上から下るもの、神から与えられるものを表しています。

ベート(ב)…家を象った象形文字です。神の家、御国を直接的に表す文字です。

この三つの文字が持つ意味を組み合わせると、「神の知恵によって建てられた家」となります。この世界は、神様が人間と共に住む家として創造されました。ですからトーヴはまさに天地創造を表す言葉であることが解ります。

## 6. カーナー

2:11 イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

このように、イエシュアが表した「最初のしるし」、それはご自分が天地創造の神の御子であることを示すものでした。その事実を、弟子たちは信じたということです。

最初に述べたように、このカナの婚礼のしるしは、カーナーというヘブル語にすべて集約されています。すなわち、父なる神様が御子イエシュアの花嫁を「得る、買い取る、買う」ということ。そして花婿なるイエシュアと花嫁が共に住む家として、かつてご自身が「創造し、形造ら」れたこの世界を再び「形造られる」回復さ



れるということです。これが神様のご計画であり、私たちが信じなければならない、そして伝えなければならない御国の福音です。このカーナー(קָנָה)を構成する三つの文字の意味も見てみましょう



コーフ(ק)…後頭部を象った象形文字です。「巡る、還る、回復、希望」という意味があります。

ヌーン(נ)…魚を象った象形文字です。「規定、子孫、増加」という意味があります。

ヘー(ה)…窓を象った象形文字です。「見る、生きる」という意味があります。

これらの意味を合わせると、「回復の希望、子孫の繁栄を見る」となり、アブラハム、イサク、イスラエルに約束された「あなたの子孫は地のちりのように多くなる」と言われた神様のご計画と見事に合致します。しかしこれは回復の希望ですから、一度は破壊され、奪われ、滅ぼされ、その後に表されるのです

## 7. 母

最後に、なぜこのカナの婚礼のしるしに、イエシュアの母の姿があったのかを考えてみたいと思います。雅歌の3章にこのような記述があります。

シオンの娘たち。ソロモン王を見に出かけなさい。ご自分の婚礼の日、心の喜びの日のために、母上からかぶらせてもらった冠をかぶっている。(雅歌 3:11)

婚礼を意味するハトゥツナー(הַתְּנִיחַ)が、旧約聖書の中で使われている唯一の箇所がここです。ソロモン王は「ダビデの子」です。イエシュアは、婚礼という場にわざわざご自分の母の存在を表すことで、この雅歌 3:11 を想起させ、イエシュアはご自分が「ダビデの子」すなわちメシアであることを表しておられると考えられます。

イエシュアの母の「ぶどう酒がありません」という一言、この母の一押しがなければ、カナのしるしは表されなかったでしょう。この雅歌の「冠をかぶらせる」という部分に使われているヘブル語はアータル(אֶטָר)で、主な意味としては「困む、迫る」で、軍隊が敵に押し迫るような意味があります。手伝いの人たちに指示を与えられるような立場だったイエシュアの母は、きっと何らかの責任を任されていたことでしょう。それだけに宴の最中にぶどう酒がなくなる事態は母にとっても大ピンチだったはずです。鬼気迫る様子で「ぶどう酒がないわ!」とイエシュアに詰め寄った、まさにアータル、押し迫って呼び求めたことでしょう。そんなイエシュアの母の姿が、ソロモン王の婚礼を通して、花婿なるイエシュアと花嫁なる教会との関わりを歌ったこの雅歌とつながっていることに、このカナの婚礼のしるしの奥深さを感じます。

このように、カナの婚礼のしるしは、イエシュアご自身の婚礼を表したしるしであったと考えられます。

## エペソ

5:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

カナの婚礼の奇蹟とは、ただ水がぶどう酒に変わったというものではなく、「偉大な奥義」が示されたのだということ信じます。